群馬イノベーションアワード協賛社　トップ座談会 1

生き残り懸け挑戦

起業家発掘プロジェクト「群馬イノベーションアワード（GIA）2019」の実行委員と特別協賛社、パートナー企業のトップらが「わが社の成長戦略」をテーマに、開発力や社員教育、地域貢献などについて座談会形式で意見を交わした。その様子を6回シリーズ（原則金曜日掲載）で紹介する。

「わが社の成長戦略について語り合った参加者＝シンク・ラボ　カフェスペース（東京）

出席者

ジンズホールディングス	田中仁CEO
赤尾商事	赤尾佳子社長
群馬トヨタ自動車	横田衛社長
こもれび	小井土匡彦社長
ジャオス	赤星大二郎社長
タカラコーポレーション	榎本太平常務
永井酒造	永井則吉社長
ひかり税理士法人	高橋正光代表社員
富士スバル	斎藤郁雄会長兼CEO

変革に対応

眼鏡型医療機器を　田中

たなか・ひとし　1963年、前橋市生まれ。88年にジェイアイエヌを設立、眼鏡事業に進出し、「J-1NSブランドの新商品が次々にヒット。2014年、起業支援、地域振興を目的に田中仁財団を設立

田中　将来的に今の眼鏡のビジネスはなくなるのではないかと危機感がある。小型スピーカー内蔵のサングラスや音声認識AI（人工知能）を搭載した眼鏡などが開発され、カメラがスマートフォンに取って代わられたような状況に眼鏡もなるのではないかと感じている。出店を増やしてビジネスを拡大していくモデルには厳しい。変革していかないと生き残れない。そういった意味でも、世界初となる近視の進行を抑制する眼鏡型医療機器の製品化を数年後に実現させたい。

横田　危機感ということは自動車を取り巻く環境も同じ。少子高齢化や人口減少などを背景に、トヨタ自動車の豊章男社長が「勝つか負けるかではない。生きるか死ぬかだ」と瀬戸際の戦いを強調している。今年、かつてトヨタ自動車販売店協会の理事長を務めたり、メーカー販売店の生き残りをかけたせめぎ合いの中で、「100年に一度」ともいわれる大変革期に対応していきたい。

斎藤　横田さんと同じく自動車販売業界だが、車の使い方や所有の考え方がだんだん変わってきている。そんな中で、一人一人のお客さまと長く、深い付き合いをさせていただくことがあらためて重要になる。ただ販売するだけでなく、整備や保険を含めたクロスセリングを通じてお客さまとつながっていくこと。そのためには、社員の質が大切になってくる。

横田　車の将来は自動運転やそれに伴う新たなサービス提供など大きな変革が起こるだろうが、斎藤さんと同様、地元密着の販売会社の強みは何と言ってもお客さまの情報。親子、孫と3代、4代のデータを生かし、群馬での暮らしがもっと豊かで楽しくなるような次のアクションを起こしていきたい。

赤星　SUV（スポーツタイプ多目的車）を中心に、アルミホイールや自然環境の中で行われるレジャーは商品の魅力性や性能を確認でき、人材育成にもつながっている。

斎藤　人材という点では、どうしたら優秀な社員を採用し、モチベーション高く働いてもらえるか、それには職場環境の改善も重要になってくる。具体的には、かつてメカニックの仕事はまだ屋外のような環境で暑くて、寒くて大変だったが、今は冷暖房完備の屋内で清潔に作業ができるように力を入れている。

赤尾　「油の町医者だれ」を経営理念に創業68年を迎えた。ガソリンスタンドやLPガス、産業用燃料、工業用潤滑油販売などの事業を手掛けているが、環境変化のさに危機感を抱いている。そこで、2030年に向けた成長ビジョンを描いた。一例を挙げれば、世の中の困り事を解決する会社にしていきたい。その中から新事業を生み、30以上の子会社を立ち上げた。チャレンジする社員を応援し、企業内起業を推進していく。

あがわ・よしこ　1962年、高崎市生まれ。51年に創業した石井製品販売業の赤尾商事に98年に入社、取締役などを経て2008年に代表取締役就任。群馬イノベーションスクール（GIS）6期生として学んでいる

企業内起業を推進　赤尾

よこた・まもる　1961年、高崎市生まれ。大学卒業後、群馬トヨタ自動車入社。トヨタ自動車出向を経て、2005年から現職。今年1月からトヨタ自動車販売店協会理事長。ネッツトヨタ高崎、トヨタレンタリース群馬などの社長も務めている

地元密着の強みを　横田

こいで・まさひこ　1963年、下仁田町生まれ。2009年に「こもれび」を創業。本県と埼玉県で サービス付き高齢者向け住宅をアイサービス、放課後等デイサービスなど28事業を運営している

自立型人材の創出　小井土

あがほし・だいじろう　1972年、東京都生まれ。大学卒業後、カナダで3年間過ごす。97年に学校法人専修学院に入社。2008年から現職。5年連続でアジアクロスカントリーラリーに出場

カーライフを彩る　赤星

人材の育成

地域の発展に貢献　石井

いしい・げのり　1964年、前橋市生まれ。大学卒業後、2004年から石井設計（石井アーキテクトパートナーズ社長を務め、15年に石井アーバンデザインリサーチを設立。1級建築士の資格を持つ

石井　前橋、高崎両市でそれぞれ総合建築設計事務所を展開している。人口減少が進む中、自らのノウハウを生かし、地域発展に貢献することが成長戦略と考え、4年前に「石井アーバンデザインリサーチ」という三つ目の会社を立ち上げた。都市デザインの研究所で、例えば市の委託で新しいまちづくりのビジョンをまとめたり、県庁周辺の前橋城にあった重橋門を独自に3D画像で再現した。歴史の復元と新しいまちづくりをムービー化し、提言している。

榎本　家電や携帯電話の販売のほか、外国人の求人、職業訓練の4本柱で多角化経営を推進していく。赤尾さんの話にあったように、困り事の解消をしていくのが会社の方向性。その一つが外国人の求人。ここ数年、人材採用が難しくなっていると言う相談が寄せられていた。一方で地元の太田市や隣の大泉町は外国人が多く、働きたいのに求人票の日本語や仕事内容が理解できないという問題があり、マッチングを事業化した。

高橋　この春、社長に社員専用のカフェを設けた。都内の世界的な工業系のカフェなどを参考にしたが、なぜかというと、優秀な人材を採用するための一環。かつて食堂がなくて税理士は人気の職種だったが、今は厳しい。法人数は減り、将来はAI（人工知能）に取って代われるとも言われている。市場が狭まっていく中で、お客さまに選ばれるためには優秀な人材確保からだめで重要になってくる。

小井土　県内に埼玉県北部で介護事業を中心に展開している。団塊の世代が2025年に75歳になるが、75歳はまだまだ元気。本当に介護需要が高まるのは30年以降で、需要に対しての介護力がその一つ。開発に5年を掛け、700回も失敗して商品化した。有志によるaw a酒協会をつくり、今では83社が21社に増え、合わせて間12万本を製造。日本は世界有数のシャンパン輸入国なので、スパークリングの造り酒屋で66位。日本酒の市場拡大の余地は十分にある。

田中　開発という点では、冒頭で触れた近視の進行を抑制する眼鏡型医療機器は、慶応大医学部のベンチャーと共同で進める。太陽光に含まれる紫色の光を活用し、世界で画期的なものになるだろう。近視率が高いとされる小学生向けを予定し、製品化されれば子どもの頃からシンズに親しんでもらえる。

永井　酒造りでこれからチャレンジを続けて日本酒の市場規模は10分の1くらいに。日本酒の輸出は伸びているが、まだまだ。でも成長の可能性は無限大にあがっている。来年にも世界にインパクトを与えられるような美表をしたいと思っている。

赤星　車の部品を海外にも輸出しているので、ラリーは好のアピールの場となる。そこで得られたデータやアイデアを部品の開発や改良に生かしている。将来的の車をつくり、通したライフスタイルを成長していきたい。

赤尾　私たちの業界は男社会。これから多様な働き方を進め、女性の管理職や社員を増やしていきたい。というのも、女性に寄り添うサービスやデザインは女性の感性が必要。100年企業を目指し、群馬イノベーションスクール（GIS）で若い人たちと一緒に学んでいる。

小井土　高齢者とは別に、3年前からコミュニケーションや集団生活、あるいは基本的な運動が苦手な子どもたちに、運動と学習を組み合わせた療育プログラムを提供している。通っている子どもたちの大きな変化に手応えとやりがいを感じており、今後は「この療育プログラムをさらに広げ、子どもたちが自立していける環境づくりをしていきたい。

高橋　最近は相続の相談が増え、社員約40人のうち専属で8人を充てている。相続は手続きが煩雑で時間もかかる。争いごとになり、お通夜でけんかが始まってしまうこともある。近年は家庭裁判所での調停も時間がかかっている。しっかりした事前手続きが大切。紹介元の依頼が多く、成長の鍵はやはり人材である。

榎本　多角化経営で社員教育はますます重要になってくる。これまで以上に時間をかけてやっていきたい。それとともに地域密着の会社として、地元でどんな貢献ができるのかを考えて事業展開を進めていきたい。

えのもと・たへい　1981年、東京都生まれ。大学卒業後、システムインテグレーターで法人営業を担当。2011年、タカラ電器（現タカラコーポレーション）に総務部長として入社、現在に至る

多角化へ社員教育　榎本

なかい・のりよし　1972年、川場村生まれ。95年に永井酒造に入社。専務取締役工場長を経て2013年に代表取締役社長に就任。aw a酒協会を16年に設立し、理事長を務める。会員は21社に上る

日本酒の価値創造　永井

たかはし・まさみつ　1955年、高崎市生まれ。大学卒業後、85年に東京都で税理士事務所開業。90年、父親の死去に伴い高崎市の事務所を承継。高崎を中心に東京、さいたまに事務所を展開している

成長の鍵握る人材　高橋

さいとう・いくお　1967年、前橋市生まれ。大学院卒業後、外資系証券会社勤務を経て95年、富士オート入社。2003年にグループ会社のユーロプレッソア代表取締役社長、15年から富士スバル代表取締役会長兼CEO

クロスセールスを　斎藤

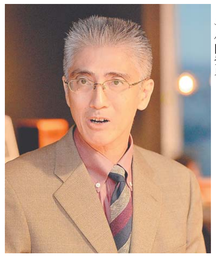
社員と一緒に成長

いけだ・みちなり　1981年、東京都生まれ。伊勢崎市育ち。大学在学中の2015年、ジぶんカンパニーを創業し、社長に就任。前橋市中心街を中心に予防医療サロンプライベートジムDROIT.5店舗を展開する

「未病」に取り組む　池田

さいとう・こい　1970年、中国生まれ。2006年に十割そば専店「竹林」を開店し、08年にイイコーを設立。そば店経営のほか、業務用食材の仕入れや販売業務、そば粉の製粉業を行っている

世界にそば文化を　齋藤



ちく・まさゆき　1964年、鹿児島県生まれ。2001年、高崎商科大商学部准教授を経て15年より現職。情報関連科目、教職課程科目を担当。くんまプログラミングアワード（GPA）作問委員

企業との連携に力　築

なかむら・けいたろう　1971年、前橋市生まれ。造園・外構工事会社勤務を経て、2003年に家業の前橋園芸入社。10年から現職。公共工事や造園工事をはじめ、観葉植物レンタル、生花販売も手掛ける

快適職場お手伝い　中村

ちく・まさゆき　1964年、鹿児島県生まれ。2001年、高崎商科大商学部准教授、運動療法士、管理栄養士といった医療の専門家を雇用し、居宅介護施設に加え、発達障害などがあるお子ども を保護者の外出時や働いている間に預かる放課後デイサービスを始めた。拠点が4年で5カ所に増える など順調に推移している。

齋藤　2006年、太田市内にそば処「竹林」を開業し、十割そばにこだわってきた。十割というとポソポソ、パサパサのイメージがあったが、そうではなく、香りや風味があり、食べやすい十割そばを提供したかった。そうは粉は群馬県や北海道だけでなく、中国、モンゴルで作っている。特にモンゴルの大地は栽培に適している。現在の年3千～4千ヘクタールの土地で収穫量は5千トンの地域。将来は現在の日本全体の年間輸入量の半分に当たる5万トンを目指したい。

中村　人材育成だと会社負担で資格を取得できるようにしている。以前は折角だったが、誰を取得すず、技術が低下の懸念があったからだ。最近は日本で庭に寝る人が減っているので、技術維持も兼ねて中国など海外に展開している。

齋藤　そば業界も店や職人が減っている。そこで来年、太田市内にそば作りを学べる「日本蕎麦文化学院」、通称「そば大学」を開き、職人育成や開業前後のサポートに取り組む。宿泊設備を備え、海外からも勉強に来られるようにする。太田から世界にそば文化を広げたい。

串田　人材不足という言葉がよく出る時代だけに今、会社にいる社員にどこまで投資できるかを考えている。一方的にこうありたい」と伝えるだけでなく、社員がどう受け止め、納得できているかを細かな研修を受けられるようにした。研修を受けて終わりではなく、学んだことを社員間で共有し、業務に反映させる機会を設けている。その中で、さらに課題見つけ、振り返り、研修で解決を目指す。計画、実行、評価、改善を繰り返す「PDCAサイクル」のイメージだ。

串田　成長戦略のテーマは共感。当社がなぜ存在し、どんな価値を提供できるのか、事業実習やことなど当たり前のように使える安全安心を提供し、地域の社会基盤を守り続けたい。

山崎　警備業は機械を取り付け、センサーが反応すると警備員が向かう機械警備、市役所や工場などに常駐する常駐警備があるが、24時間365日動ける人材を持つ自社の強みを生かし、人を出す仕事に力を入れている。

中村　人材育成だと会社負担で資格を取得できるようにしている。以前は折角だったが、誰を取得すず、技術が低下の懸念があったからだ。最近は日本で庭に寝る人が減っているので、技術維持も兼ねて中国など海外に展開している。

齋藤　そば業界も店や職人が減っている。そこで来年、太田市内にそば作りを学べる「日本蕎麦文化学院」、通称「そば大学」を開き、職人育成や開業前後のサポートに取り組む。宿泊設備を備え、海外からも勉強に来られるようにする。太田から世界にそば文化を広げたい。

石井　成長戦略としてZEB（ネット・ゼロ・エネルギー・ビル）などを取り入れた設計改革に力を入れている。ZEBは省エネや太陽光発電などを駆使した設計で、消費電力と同等のエネルギーを生み出し、実質的にゼロにする建物の消費電力をゼロにする。会社の生産性の不動産価値、企業イメージ向上にもつながる。

築　経営学科では電通、アドビンステム、すき屋グループ、ハイレックランなどと連携した教育プログラムも取り入れ、企業連携に力を入れている。一線の企業人から生徒が学び、ノウハウを吸収している。こうした経験を通じ、学生に地域社会の役に立つ力をつけてほしい。

池田　大学医学部や医療施設と連携している。会員から倉庫の写真や心拍数や睡眠の状況、体組成情報などを収集しAIを大学との共同研究で分析し、遺伝子検査などとリンクさせて数年後の予察し、さらに根拠ある予防医療を提供したい。

中村　外構造園業と観葉植物レンタル、冠婚葬祭の生花という3事業のうち、成長戦略としてインドアグリーンに力を入れている。都内で緑を取り入れた快適なオフィスだ。都内のムーブメントは将来的に地方に広がる。戦略的に取り組んでいきたい。

榎本　家電や携帯電話の販売のほか、外国人の求人、職業訓練の4本柱で多角化経営を推進していく。赤尾さんの話にあったように、困り事の解消をしていくのが会社の方向性。その一つが外国人の求人。ここ数年、人材採用が難しくなっていると言う相談が寄せられていた。一方で地元の太田市や隣の大泉町は外国人が多く、働きたいのに求人票の日本語や仕事内容が理解できないという問題があり、マッチングを事業化した。

高橋　この春、社長に社員専用のカフェを設けた。都内の世界的な工業系のカフェなどを参考にしたが、なぜかというと、優秀な人材を採用するための一環。かつて食堂がなくて税理士は人気の職種だったが、今は厳しい。法人数は減り、将来はAI（人工知能）に取って代われるとも言われている。市場が狭まっていく中で、お客さまに選ばれるためには優秀な人材確保からだめで重要になってくる。

小井土　県内に埼玉県北部で介護事業を中心に展開している。団塊の世代が2025年に75歳になるが、75歳はまだまだ元気。本当に介護需要が高まるのは30年以降で、需要に対しての介護力がその一つ。開発に5年を掛け、700回も失敗して商品化した。有志によるaw a酒協会をつくり、今では83社が21社に増え、合わせて間12万本を製造。日本は世界有数のシャンパン輸入国なので、スパークリングの造り酒屋で66位。日本酒の市場拡大の余地は十分にある。

田中　開発という点では、冒頭で触れた近視の進行を抑制する眼鏡型医療機器は、慶応大医学部のベンチャーと共同で進める。太陽光に含まれる紫色の光を活用し、世界で画期的なものになるだろう。近視率が高いとされる小学生向けを予定し、製品化されれば子どもの頃からシンズに親しんでもらえる。

永井　酒造りでこれからチャレンジを続けて日本酒の市場規模は10分の1くらいに。日本酒の輸出は伸びているが、まだまだ。でも成長の可能性は無限大にあがっている。来年にも世界にインパクトを与えられるような美表をしたいと思っている。

赤星　車の部品を海外にも輸出しているので、ラリーは好のアピールの場となる。そこで得られたデータやアイデアを部品の開発や改良に生かしている。将来的の車をつくり、通したライフスタイルを成長していきたい。

赤尾　私たちの業界は男社会。これから多様な働き方を進め、女性の管理職や社員を増やしていきたい。というのも、女性に寄り添うサービスやデザインは女性の感性が必要。100年企業を目指し、群馬イノベーションスクール（GIS）で若い人たちと一緒に学んでいる。

小井土　高齢者とは別に、3年前からコミュニケーションや集団生活、あるいは基本的な運動が苦手な子どもたちに、運動と学習を組み合わせた療育プログラムを提供している。通っている子どもたちの大きな変化に手応えとやりがいを感じており、今後は「この療育プログラムをさらに広げ、子どもたちが自立していける環境づくりをしていきたい。

高橋　最近は相続の相談が増え、社員約40人のうち専属で8人を充てている。相続は手続きが煩雑で時間もかかる。争いごとになり、お通夜でけんかが始まってしまうこともある。近年は家庭裁判所での調停も時間がかかっている。しっかりした事前手続きが大切。紹介元の依頼が多く、成長の鍵はやはり人材である。

榎本　多角化経営で社員教育はますます重要になってくる。これまで以上に時間をかけてやっていきたい。それとともに地域密着の会社として、地元でどんな貢献ができるのかを考えて事業展開を進めていきたい。

斎藤　人材という点では、どうしたら優秀な社員を採用し、モチベーション高く働いてもらえるか、それには職場環境の改善も重要になってくる。具体的には、かつてメカニックの仕事はまだ屋外のような環境で暑くて、寒くて大変だったが、今は冷暖房完備の屋内で清潔に作業ができるように力を入れている。

赤尾　「油の町医者だれ」を経営理念に創業68年を迎えた。ガソリンスタンドやLPガス、産業用燃料、工業用潤滑油販売などの事業を手掛けているが、環境変化のさに危機感を抱いている。そこで、2030年に向けた成長ビジョンを描いた。一例を挙げれば、世の中の困り事を解決する会社にしていきたい。その中から新事業を生み、30以上の子会社を立ち上げた。チャレンジする社員を応援し、企業内起業を推進していく。

おかだ・ゆういち　1972年、福岡市生まれ。邑楽町で育ち、大学卒業後、ノンバンク系金融機関勤務を経てオオラ美装に入社。ビルメンテナンス業務などを経験して営業部長、副社長を歴任し、2009年から現職

共感 社員で深める　串田

くしだ・ようすけ　1979年、高崎市生まれ。2009年にアジアエ業入社。15年から現職。17年エルスピーナホールディングスを設立し、社長に就任。同年、システム開発会社のエルスピーナヴェインズを共同設立

人を出す仕事に力　山崎

やまざき・けん　1969年、東京都生まれ。大学院で危機管理を学び、修了後に米国留学して3年間、危機管理を研究。97年、27歳の時に国際警備に入社し、2012年から現職。危機管理のプロを自認

ファイナルステージ　12月7日（土）　ヤマダグリーンドーム前橋　12:00開場　14:00開幕　入場無料